

オープンミーティング

日時 2022 2 月 27 日の 15:30~15:00

テーマ 「P4C における「問い」の考察」

提題者 森本 和夫 大阪府小学校教員

司会 北浦貴之

参加者は全員で 9 名

最初に参加者の自己紹介

発表

P4C における「問い」の考察

●経歴など

P4C は 2 時間構成で。

- ・ 1 時間目は教科書を使って道徳
- ・ 2 時間目は道徳から生まれた「問い」を話し合う

●問いの決め方

道徳の授業の後の振り返りで、みんなから出された問いを、多数決で、過半数になるまで何回も決を採って決める。

●問いを決める基準を子どもに提示

- ・ 答が決まっているようなこと、すでに話し合ったことは選ばない
- ・ 話し合っても意味がないようなものは選ばない
- ・ みんなで話し合って楽しそうなものを選ぶ

●1 年間で選ばれて決まった「問い」たち

テキストは東京書籍小 5 の道徳

例えば、

- ・ どうして農民の自然のためにお金や自分の幸せをうしなうのか？
- ・ いじめをして、何のとくがあるのか？
- ・ 決まりは、本当に「みんな」がいい気持ちになるのだろうか？
- ・ 流行がおくれているなら、何がいけないのか？

●森本が疑問を持った問い

子どもが決めた問いに対して、

例えば、「いじめをして、何のとくがあるのか」という問いには、「いいわけないやん！」とか、「決まりは、本当に「みんな」がいい気持ちになるのだろうか？」という問いには、「そんなわけないやん！」というように、

話し合う前から結論が決まっているものを選んではいないかと感じた思った。なぜこういう問いが選ばれがちなのか。

●問いの4象限（フィリップ・キャム『子どもと倫理学』を参考）

- ①調べたらわかる問い
- ②専門家に聞けばわかる問い
- ③ふさわしいものがあれば、どんなものでも答えになる問い
- ④みんなで議論する価値のある問い

これらをいつも授業の際に念頭に置いておく

●最近の実践

教材名「流行おくれ」

出された問い

15個

その内、例えば「ものはなぜあるのか」、「なぜ人間には、服の流行があるのだろうか」というような問いを選んで欲しい

決った問いは「流行が後れたら、何がいけないのか」。これは一発で決まった。

なぜこの問いが選ばれるんだろう。

●この問いが選ばれた理由の考察①

- ・話しやすいから？
- ・あんまり考えなくてもいい？
- ・答えやすい？
- ・答が決まっている？

●この問いが選ばれた理由の考察②

イエス/ノーで応えやすいのでは！

●この問いが選ばれた理由の考察③

「流行がおくれているなら、何がいけないのか？

- ・はい、流行に後れてもいいと思います。なぜなら～
- ・いいえ、流行にはおくれてはいけないと思います。なぜなら～

確かに、はい/いいえの問いは答えやすい。

- オープンクエスチョンとクローズドクエスチョン

- クローズドクエスチョンは答えやすいがつまらない。

最後は、結局、どちらでもいいと思いますとなって、盛り上がらないまま終わってしまう

- オープンクエスチョンへの問いの変換

「どうして、男子よりも女子の方が、たくさん服を持っているのか？」

- 問いが変わると

子どもから次々と発言が出てきて、すごく盛り上がる

- 理想の問い

理想はオープンクエスチョン

しかし、オープンクエスチョンは、難しく選ばれにくい

(年度によって違いがある)

入りはクローズドクエスチョンでもいい

教師のファシリテートで、問いを変えることができる

【P4C における「問い」に関しては、「問いの 4 象限」という考えがあるが、それを念頭に置きつつ、どのようにしたら、議論が深まり、探求の共同体が形成されるかを意識して問いを作ることは難しい。まして、子どもたちが自ら問いを作っていくときには、一層難しく感じる。というのは、やはり子どもは答えやすい問い、はい/いいえで応えられる問い

(クローズドクエスチョン)を選びやすい。しかし、教師はそのような子どもの閉じられたと思われる問いから出発しても、問いを深めるようにその問いを変換し、ある意味理想の問い(オープンクエスチョン)に変換することができる。】

Q&A&C (コメント)

Q：人それぞれでいいじゃん、という形になったとき、議論が行き詰まってしまうが、その時、教師は新しい問いを作って投げてあげるのか、それとも子どもの中から新しい問いが出てくるのを待つのか。

A：ある意味、いつもそのような状態が続いている。中高学年になると最終的に自分の判断でいいじゃんという感じになる。その場合、それは出発点だよって言う。人それぞれから始まらないと、みんなで話し合っている意味がない、ということはよく言う。人それぞれだったら、何も共有してないし、人の話を聞いただけで終わってしまう。それじゃ、もう少しここから考え直そうかと投げかける。

Q：教師の側から問いを投げかけることもある。

A：それはある。ジャー、僕から質問ねっと言って、変化球を投げたり、こういう視点もあるんじゃないと直球を投げるときもある。先ほどの授業では后者のケース。

C：問いを問い直すというケースはあると思う。話し終わっちゃったね、どう続ける、とか、丸投げする時もある。時間があつたり、問いについて考えさせたいのだったら、もう一遍子どもに返してみて、今までの話し合いだったら、これで終わってしまったけど、なんでこうなるんだろう、という感じで、振り返らせる(45分の授業では短いので、難しいところはある)。どうしてこうなったかの原因を考えさせて、話し合いの問いというものはいったいどういうものか、という迫り方もある。あるいは、何か次の問いはある、と子どもに向けることもある。

C：人それぞれっていう場合、それでは、何が共通で、何が違っているのかなという問いかけもある。

C：小学生の場合は、あまり人それぞれっていうことは出てこない感じがする。

Q：ホワイトボードに書き込むと言われましたが、どういうことですか。

A：「幸せってどういうこと」と書いて、生徒が自由にそれに書き込む。その書き込みの中から一つ選んで、それについて生徒が書き込みをする。例えば、「ツイッターは正義」という書き込みがあったので、教師としてはどういう事だろうということを書き込むと、「人それぞれ」というような書き込みがある。

高校生が積極的に P4C に参加してもらうにはどうしたらいいか

C：高校生には言葉の使い方が軽いのかもしれない。真剣にとらえるのをあまり良しとしないというような文化があるのかもしれない。哲学対話をするときに、教員の子どもの捉え方と子どもの言葉の捉え方が違うと、何かうまく絡み合わないのかなという気持ちがある。

C：哲学という言葉の捉え方についても言えるのかもしてない。

C：子どもたちが小中を通じて、対話してきている経験がないからではないか。単に子どもたちのせいだけとは言えない。リップマンの発想の背景にはこういうことがあったのではないか。

C：サイレント・ダイアログという取り組みもあるようですね。

Q：「どうして、男子よりも女子の方が、たくさん服を持っているのか？」という問いで議論が盛り上がったということで、それがオープンクエスチョンだということだったが、この問いはクローズドクエスチョンでもないか。一概に、オープンだから、クローズドだからではない気がして、言い換えれば、オープンだからと言って必ずしも盛り上がるわけではないし、このあたりが、これまでの議論と噛み合っているのではないか。これについてどう思われるか。

A：クラスの雰囲気、議論する集団の雰囲気というのがすごくあって、頭に汗をかくということをよく思っているが、そういうことが許される、生の感情をぶつけ合うという集団作りができていれば、難しいこと、僕が選んで欲しい問いにもチャレンジしようかな、ということにもなると思う。しかし、今年一年を振り返ったとき、私が当てられても応えられるよっていう、そういう雰囲気、そういう問いが選ばれがちだったかなと思う。はい/いいえで応えて、最後はどちらでもいいんじゃない、たとえば、自分の責任から解放されるという状況があった。難しい問いを出してくれる子もいるが、それを選んで難しい問いにチャレンジするようなクラス作りにはなっていなかったように思う。言い換えれば、問いを深めていける探求の共同体をつくることの難しさを自覚させられている。一般論で応えることは容易であるが、探求の共同体の中で、それを越えた問いで話し合うのは難しい。

Q：「流行に後れることがないないけないのか」ということは、時間の問題ではなくて、集団の問題として探求的に行けないのか。

A：どこまで哲学感を出すかという問題。みんなで話し合っ楽しいのは大前提ではあるが、そこからどういうように、P4C となっていくのが難しい。ある意味哲学的な問いに関して、何らかの共通理解が欲しいが難しい。こういうことを前面に出すと、こういうことはつまらないになってしまう。苦しみながらみんなで考えるのが実は勉強なんだということ伝えたい。

Q：問いの出だしは楽しいこととあったけど、今の苦しみながらということとどうつながるのか。入り口は楽しいけれど、だんだん苦しくなってくるということにもなるので、その辺の案配はあるのか。

A：それはあります。いきなり苦しみを出すのはつらいから、だんだん、アレってなる、ちょっと頭使わなならんという感じ。自分の直感で言えるものではなくて、少しずつ考えていくようにする問いの変換をするよう努力している。

C：道徳の問いは暗いものが多いのではないかな。楽しくない。

C：人それぞれということですが、現代社会、日本では許されがたいという側面があるのではないかな。あなたはあなたのままでいいというのはあまりなくて、教員の世界もそうではないかな。パーマなどを当てていくと、男の先生だと怒られて、女性の先生だったら染めていても怒られない。こういうことが根強くあるのではないかな。道徳では三つの理解ということが出てくるが、つまり他者理解、価値理解、人間理解という三つの理解が出てくるが、人それぞれでいいよねっていうのは人間理解と繋がっている。人それぞれでいいよねって、頭ではわかっているが、でもできないよねっていうことがある。もしかして、そこに教師から問いが投げかけられるのではないかなと思った。人それぞれっていうけどさー、人のおしゃれ見たらさー、何か、自分ダサイなーとか、友だちからダサイって言われるやん、分かっているのになんでみんなできないんだらうね、というような感じにもっていつちゃうんだらうな、と思った。やはり、これは道徳的なアプローチかな。

C：問いを多数決で決めるのはいいのかな、多数決だと自分の言いやすい問いに流れることはないかな。これまでの敬虔で一番印象に残っているのは、自分がどうしてもこれを皆に問いかけてみたいという子もいたということ。これは道徳ではなくて、「いじりといじめはどう違うのか」という問いであった。先生はいつもいじめはダメだと言っているのだから、このことについてみんなと話し合いたいということがあった。

Q：問いの規準をどうするかで、またどういう問いがいいかは変わって来るのではないかな。先の 15 の問いの中には、面白いものがたくさんあったと思うのですが、その点はどうですか。

A：子どもたちは、流行って言うてもなー、それぞれ好きな服を着ていればいいじゃん、という感じが強かった。あ、これで終わったなという感じ。子どもの内には何十年か前のものが流行っているということがあって、これって流行おくれなん、それでいいんじゃない、今面白いからそれでいいんじゃない、流行おくれでもなんでもないよね、という話になって、流行遅れだって悪くないよね、ってあっさり結論を出してしまっていた。

C：人それぞれも、意味合いは、ポジティブにもネガティブにも捉えられるのではないかな。人「それ、ぞれ」なのに、人「それぞれ」としてくくってしまっている。人それぞれって寛容なの受容なの、それとも無関心なの、どっちの言葉として使われているのだらう。人それぞれって、A と B にはそれぞれ立場があって、それを認めるというポジティブな意味があるのではないかな。それが無関心という意味合いで使われているので、ネガティブな感じがする。人それぞれっていう場合、その一つ一つのそれって何って突き詰めたら変わって来るのではないかな。

C：小中学生の判断の基準が多様化し過ぎていて、CD ランキングというのがない。ヒット曲というのを知らない。流行遅れというこの教材も 2-30 年前のもの。今に合っていないと言えば合っていないのではないか。子どもはほとんどテレビを見なくて、今はユーチューブを見ていて、価値判断の基準が多様化している。そういう点で、子どもは人それぞれって言っている。これはポジティブと言っていいのかどうか。多様過ぎて関心が向かない。流行おくれの題材がかなり古い時代のことが題材になっている。

C：これは非常に面白い指摘だと思う。テキストの意図と子どもの感覚がすでに大きくずれていると言っていいのか。

この後、インターネットの繋がりがうまくいかず、記録は取れなかった。